

日曜寺子屋家族塾 の取り組み 6

古川 秀明

◆2012年 第一期生 4家族 16名参加

「子どもの様子」

第一期生で参加した子どもの年齢は0歳から16歳まで。

つまり、赤ちゃんから高校生まで。

この年齢の幅をどのように埋めるのか、講師は不安だった。

赤ちゃんには勉強よりミルクが必要だ。

1時間目、中井が担当する仮説実験授業は「目には見えない分子」の授業。

小学生でもわかるように授業内容は工夫されているが、乳幼児には到底理解できない。

きっと小児科の待合室のように騒々しい教室になるだろうと思っていたが、そんなことはなかった。

赤ちゃんを含む乳幼児は皆おとなしく授業に参加している。

参加しているといっても授業を理解しているわけではない。

授業に楽しそうに参加している両親や兄、姉を見て何かを感じているように思える。

家族みんながにこにここと笑いながら勉強している姿をみているだけで子どもは安心するようだ。

仮説実験授業は休憩を入れて2時間の授業なので、いかに安心しているとは言え、やはりぐずりだすこともある。

そんな時はスタッフが子どもを抱いて散歩に出る。

最初はスタッフに人見知りしている乳幼児もすぐに慣れてくれた。

「親の様子」

講師がぐずる乳幼児を連れだすと、母親がとても楽そうな表情になった。

乳幼児の子育ては、なかなか息を抜く暇がない。

安心して任せられる講師に子どもを預けることは、少なからず母親の息抜きになった。

そして、その息抜きが分子の勉強。

「学生の時とは勉強の息抜きに何かをしたのに、今は子育ての息抜きに勉強しています」と笑いながら答えてくれたのが印象的だった。

「学生の頃は嫌でしょうがなかった勉強がこんなに楽しくて分かりやすいとは思いませんでした」と言う人が多いのにも驚いた。

大人の社会人という身分から、教室にいる生徒の身分に戻れたのも変化があって楽しいのかもしれない。

学生の時とは「こんなつまらないもの、覚えてもしょうがない！」とつぶつぶっていた子どもも、大人になると断片的ではあるが覚えている知識も多く、それを懐かしがったりもする。

人間と言う生き物は、学ぶ生き物なのだということがよくわかる。

普段無口で、あまり存在感のないお父さんが、授業になるとすごい博学であることがわかったりする。

そうなるると今までの父親の印象も変化する。

どの親も自らエントリーして家族塾に参加しているのでもともと学習意欲は高いのだが、何かを学ぼうとする親の熱意が子どもに伝わって、子どもの学習意欲を少なからず刺激しているように思えた。

「子どもの様子」

家族と一緒になので、当然だがここにはいじめがない。

また、上下の序列もない。

そういう環境が整うと、とても勉強しやすくなる。

しかし、小さい子ども達はだんだんと騒ぎ出す。

やかましい声を出しながら走り回られると集中できなくてイライラする。

さぞかし集中できないだろうと思ったが、そうでもなかった。

人間、集中すると周りの雑音は耳に入らなくなるようだ。

というより、雑音の中から講師の声をなんとか聞きわけようと余計に集中力が増しているように思えた。

休み時間になると、大きい子は小さい子の面倒をみるようになった。

少子化できょうだいの数が少ない現代は、同年齢の子と遊ぶことが多い。

昔は様々な年齢の子と一緒に遊び、その中で序列や優しさ、厳しさを学べたが、

その効果が家族塾の子ども達のなかで起こっているのがわかった。
また、家では一人っ子や末っ子の子が、家族塾ではお兄ちゃんやお姉ちゃんの役割を担うことになり、そのこともとても新鮮な体験になっているようだ。
親が子どもに勉強を教えるというのはよくあることだが、親が勉強しているところを子どもが見るといふ経験はあまりない。
親と子という主従関係から、一緒に学ぶという横並びになることで少なからず家族システムに変化があるように思えた。

「講師の様子」

家族塾で一番元気になっているのは講師かもしれない。
何の制約もなく、自分の教えた内容の授業を自分の思い通りに教えられることが元気の源になっているようだ。
当然講師には気合いが入るし、塾生にもその熱意が伝わる。
その証拠に塾生からの質問が活発に出てくるのだ。
時には難しくて講師が答えられない質問もあるのだが、「次回までに調べて来ます」という返事をして、その次の回では必ず答えるようにしていた。
即答できない質問が来るのが、それだけ自分の授業を聞いてくれているという確信になり、それがまた講師を元気にした。
そうすると、講師は授業をするのが楽しくなり、少しでも授業を増やしたいと思うようになった。
一日に4時間の授業しかないので、それを5人の講師でシェアするのだが、授業を実施することに消極的な講師はいなかった。
誰かが授業をしているときは、他の講師はその授業の補助にまわった。
学校で言えば加配の教師が4人も教室にいるようなものだ。
小さい子がぐずりだすと、すぐに他の講師がその対応にまわった。

「振り返り」

家族塾では学習到達度を他者と競争するようなことはないし、何かの資格を得られることもない。
月に一度家族が集い、家族みんなで「勉強」を楽しんでいる。
その中で家族が何を得ているのかを可視化するために、毎回最後にアンケート調査を実施することにした。
その結果についてはまたあらためて発表したい。